



私にはもう一つの、医者顔があります。リングドクターです。船木誠勝、鈴木みのるらが創設した、世界で初めての何でもありの総合格闘技団体、PANCRASEです。今でこそ、DreamやUFC、一昔前は、PRIDEやHERO'Sなどといった総合格闘技が普通に世間一般にも周知されていますが、この世界でのパイオニア、創設15年の老舗団体です。この団体のリングドクターを8年ほど前からやらせていただいております。もちろん完全無給、交通費もなしの趣味でやっていることです。忙しい臨床の傍らで、相当なことがない限り皆勤賞で参加しております。最前列で見れるから、という訳ではありません。選手は、数ヶ月に一度の試合を組まれ、その試合に向けてまっしぐらです。金的、目潰し以外は基本的に何でもありの厳しい戦いです。勝っても負けても控え室では、体いっぱい喜び、泣き、笑い、叫び……。

自分はいつからかこんなことをしなくなったのか。子供のときは感受性が豊かで、たくさん表現したけれど、今となっては、感情を抑え、顔の表情一つ変えず、坦々と患者さんに癌を告知したり、病状説明する。医師として、プロとしては当たり前のことが、何か自分には無理があるのでしょう。選手たちが、体いっぱいにして表現する姿がうらやましくて、社会の重圧に押さえつけられながら生きている自分を蘇らせてくれるそんな舞台です。どんな結果であろうとも、トランク一枚で強いところも弱いところも四方八方から何千人、時には何万人にみられます。証拠隠滅、密室の世界なんてありません。強いか弱い、勝つか負けるか、泣くか笑うか。このどちらかの裁きに遭っている男を見て、結果がどうであろうとも、男が男にほれる、そんな気分になります。病院内で起きているイザコザ、小さいことに頭を悩ませていた自分に毎回新しい息吹を与えてくれ、月一回の興行が月一回の日常からの頭のシャッフル、最大の活力となっています。また、選手はびっくりするぐらい少ない給料しか得られません。それでも、強くなりたい一心で日々勝つことだけを考えて精進しています。私は、プロフェッショナルのモチベーションは、金か地位かやりがいのいずれかを得るために、頑張っていると思います。努力によりそれが付いてきてこそ、次のステップに進めます。その中には、裏金やコネやゴマすりやいろんなことが重なって不自然な序列も生まれます。格闘技はそれがことごとく使えない、本当に素直に結果に結びつくシビアな厳しい世界だけれども、極めて純粋な実力至上主義の世界です。この団体の一スタッフとして、一生懸命尽くし、たくさんの熱い気持ちを毎回もらっております。

今では、戦極のリングドクターもやり、また、GRABAKAの選手には特に仲良くさせてもらっております。それにしても観客はシビアです。5分3ラウンドの合計15分間だけの自己表現。ウルトラマンより短く感じるたった15分間。その瞬間の大大大大舞台にあがるまでどれだけ紆余曲折、サブストーリーがあることか。注射をしてあがる選手、極度の減量をしてあがる選手、肉や魚を何日も食べてない選手、極度の緊張とイメージトレーニングで不眠症に陥る選手…。そんな選手がようやくリングアナウンサーに名前を告げられただけで、自分はフッと息をつきますが、観衆はその後試合だけ。紙面を見る人は勝つか負けるかの本当の結果だけで、選手を判断します。言い訳無用。ただ自分が楽しければいい……。



そんな何よりも厳しい審議官を納得させる最難関の試験を 通るため、来る日も来る日も日夜強くなろうとしている彼らを、僕は最大限応援し、大きな病気を起こさないように一生懸命のバックアップを今後も出来る限り、継続します。皆さん、会場で会ったら、声を掛けてください。総合格闘技、いいですよ。

某格闘技雑誌 コラム 2008.6号

武蔵村山さいとうクリニック来院格闘家



PANCRASE:近藤有己、北岡悟、大石幸二、川村亮、伊藤崇文、アライケンジ、Windy 智美、川原誠也、渡辺大介など

GRABAKA:菊田早苗、佐々木有生、山宮恵一郎、など

金原正徳、五味隆典、高橋和夫、鹿又智成、キング・モー、ピーター・グラハム、菊池剛介、砂辺光久、ナム・ファン、谷口周平、長谷川秀

